

日本社会福祉教育学会

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education

事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1

東北公益文科大学 小関研究室 気付

Tel. 0234-41-1288 ☎ : info@jsswe.org

<http://jsswe.org/>

2022 年 11 月 30 日発行

目次

1. 巻頭言	1
合宿研修の受難 (日本社会福祉教育学会 理事 川島 恵美)	
2. 日本社会福祉教育学会 第 18 回大会報告	2
2022 年 8 月 20・21 日 大会プログラム	2
□■□参加者の声から□■□	3
3. 総会報告	7
4. 福祉教育実践/研究報告	8
◆〔連載コラム〕ソーシャルワークとリサーチ あれやこれや	
③科学としてのソーシャルワーク (京都大学大学院教育学研究科 安藤 幸)	8
◆ゼミ活動・子どもの遊び場「にっこりランド」の企画・運営	
(東北公益文科大学 小関久恵)	9
5. お知らせ	11
6. 編集後記	11

1. 巻頭言

合宿研修の受難

川島 恵美(関西学院大学)

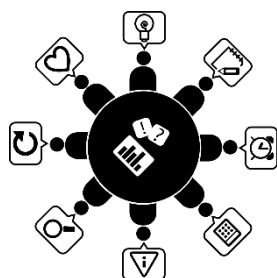
筆者の本務校では、社会福祉学科生の初年次教育の一環として、1泊2日の合宿、実習先の見学実習、学生が居住する地域のタウンウォッチングという3本の体験学習を柱とした授業を実施している。本学は、普段学生が通学しているキャンパスとは異なる場所にキャンプ場を持っており、このキャンプ場を使った合宿研修は、20年以上、福祉教育の一部として、ごく当たり前に行われてきた。特に、現在、初年次教育として学科生のほとんどが参加する合宿は、スタッフとして、教員のみならず、実習助手、2回生以上の合宿経験者がラーニングアシスタントという位置づけで1回生たちの学びをサポートする手厚い体制がとられている。日常の場から離れて、仲間や先輩と寝起きを共にし、同じ釜の飯を食べ、集中的なワークを行うという経験を通して、社会福祉を学ぶ学生としての意識付け、今後の実践教育履修やキャリアプランに向け

たイメージづくり、自分自身の人間関係のあり方など、普通の教室での授業では学びきれない多くのことを、体験を通して学ぶ機会となっている。

しかしながら、この3年間、合宿を行うことが叶わない状況となっている。2019年度は、合宿を予定していた週末に台風が襲来したためであり、2020年度と21年度は、いうまでもなくコロナ禍の影響である。合宿の代替案として、学内で、日帰りのデイキャンプという形で、合宿で行う内容を実施することになったが、コロナ禍の2年間については、三蜜を避けるために、週末の2日間を午前、午後と4つのグループに分けて3時間という短い時間でワークを実施することになった。当然ながら、これまでのような、丸二日間の合宿と比べた時、こうした代替案によるプログラムでは、時間的、物理的、内容的な物足りなさというか、不全感のようなものを感じざるを得なかった。加えて言うと、見学実習もリモートにならざるを得ず、学生は全員教室にいるわけで、これは「見学実習」と言えるのかと思った。



大学の授業とは異なるが、筆者は、これまでに、人間関係トレーニングという文脈で培われてきたラボラトリートレーニング、その中でも、Tグループと呼ばれる集中的グループトレーニングの実施にも関わってきた。Tグループも1930年代に人種差別を無くすためのソーシャルワーカーのトレーニングから出発し、日本でも60年ほど前から実施されてきた歴史を持つ。この研修は、日常生活の場から離れた「文化的孤島」と言える快適な環境の中で、3泊から5泊程度の宿泊研修として実施されてきた。そして、これらの研修も、コロナ禍の影響により、他者との宿泊、また小グループで部屋の中で対話を行う形態での実施方法が中心となり、感染の恐れがあるということで、開催を中止せざるを得ない状況が生じた。けれども、何とかTグループを行うことができないものかと、いろいろ考え、例えば、宿泊ではなく、「通い」でトレーニングを行ったり、オンラインでの実施を試みた団体もあった。しかしながら、いずれの場合も、何ともいえない違和感、いわゆる隔靴搔痒感是否めないものがあった。



先日、日本ラボラトリ・トレーナーの会という、Tグループのトレーナーが集まる研究会が、これも2年ぶりに開催されたのだが、その時に、改めて「Tグループのミニマムスタンダードとは何か」ということについて話し合う機会が持たれた。つまり、コロナ禍などによる限界があっても、TグループがTグループとして成立するために絶対に欠かせない条件とは何かということである。詳細は省かせていただくが、結果的に、人間関係の学びのためには「対面」であること、「日常から距離をおくこと」は必須であり、「通い」や「オンライン」という形態でのトレーニング

は本来のTグループではなく、あくまで代替であって、本来のTグループができないならば、できるようになるまで「準備をして」「待つ」ことも必要なのではないかという考え方が示された。無理をせず、本来的にあるべきことを見失ってはいけないという考え方が腑に落ちた。

さて、今年度の合宿であるが、キャンプ場ではまだ宿泊は禁止となっている。けれども日帰り利用は可能になったため、1日目はキャンプ場で、2日目は学内でのデイキャンプを行う予定で準備を進めている。来年度は、コロナ禍も落ち着いて、元通り全員揃って1泊2日の合宿ができるようになることを祈りつつ。

2. 日本社会福祉教育学会 第18回大会報告

去る2022年8月20・21日(土・日)、テーマを「「地元学」と社会福祉教育～社会福祉教育は「地域づくりに向けた支援」にどう向き合うのか～」として、オンラインにて開催されました。

2021年度入学生より第3期のカリキュラム制定となり、各養成校において新カリキュラムの導入が行われております。新カリキュラムを進めていく中、「地域共生社会」の実現に資するソーシャルワーカー養成を目指した科目の新設が行われ、ソーシャルワーカーが「地域づくりに向けた支援」を行う実践力を身につける必要もあります。

そこで本大会では、地元で学び、地元と活動する「地元学」に着目しました。どのようにエッセンスを取り入れ、未来の社会福祉士・精神保健福祉士を養成していくのか、議論を通じて考える場となりました。

お忙しい中、ご参加くださった皆様には厚く御礼申し上げます。

【大会プログラム】

◆2022年8月20日（土）

12:00～13:00	受付
13:00～13:15	開会式
13:15～14:15	基調講演 「“人と地域を創る”課題先進地新見での社会福祉教育」 講師：公文 裕巳（公立大学法人新見公立大学 学長 公文裕巳）
14:15～16:15	開催校企画シンポジウム 「社会福祉教育が地域づくりに向けた支援にどう向き合うのか～地域の様々なアクターとの共創による社会福祉教育実践」 シンポジスト 渡辺 裕一（武蔵野大学） 山本 浩史（公立大学法人新見公立大学） 岡 勇樹（NPO法人 ubdobe） 五嶋 仁（社会福祉法人 大樹会） コーディネーター 高杉 公人（公立大学法人新見公立大学）



◆2022年8月21日（日）

10:00～12:00	学会企画シンポジウム 日本ソーシャルワーク教育学校連盟中国四国ブロック共催 「地域共生社会の実現に資するソーシャルワーカーを育成する実習のあり方～メゾ・マクロレベルのソーシャルワーク実践を実習プログラムにどう盛り込むのか～」 シンポジスト 西川 ハンナ（創価大学） 中尾 竜二（川崎医療福祉大学） 白石 順也（今治市社会福祉協議会） 丸山 秀幸（社会医療法人ペガサス 馬場記念病院） コーディネーター 中谷 陽明（桜美林大学）
12:20～13:00	日本社会福祉教育学会総会
13:00～15:00	自由研究報告
15:00～15:15	閉会式

□■□参加者の声から□■□

基調講演に参加して

👤 総合司会

阪口 春彦会員（龍谷大学短期大学部）

竹中 麻由美先生（川崎医療福祉大学）



基調講演は、公立大学法人新見公立大学学長公文裕巳氏による「“人と地域を創る”課題先進地新見での社会福祉教育」であった。第18回大会のサブテーマである「社会福祉教育は「地域づくりに向けた支援」にどう向き合うのか～」について、一つの示唆を示す内容だった。



👉 基調講演を行う
公文 裕巳先生（新見公立大学）

“県北”と称される新見地域は岡山県の北西部に位置し、北は鳥取県、西は広島県に接している。鉄道の結節点として繁栄した歴史があることは講演でも紹介されていたが、県を南北につなぐ JR は限られている。主な移動手段は車となるが、高速道路は文字通り“高速”で走行可能。駐車場所に困らない環境は、まさに車生活を支えていると感じる。同時に、車の運転が困難な人びとのアクセス手段確保が課題であることは、県南で生活する筆者でも痛感する。ちなみに有名な千屋牛は、岡山県民でも、おいそれとは口にできない高級和牛である。

基調講演では、人口 27,557 人、高齢化率 42.6% の典型的中山間地域である課題先進地で、地域共生社会を実現していくために、「健やかな子どもの発達、こころの豊かさの向上、高齢者の健康寿命の延伸」という指標を掲げた健康科学部の取組みが紹介された。地域共生社会の実現に資する人材を育成するために新見市全域をキャンパスとした多職種連携の実践的学修を展開し、大学を含む新見市全体が持続可能となる未来を構築している。具体的取り組み事例として、地域福祉学科で開講されている。地域の交流から地域課題解決を目指す「共生社会実践演習」については、シンポジウムで山本浩史氏から報告された。報告からは、地元住民の協力、学生の努力、そして教員の労力が必要不可欠であることが伝わってきた。誰かが“やらされている”と感じたら、こうした試みは頓挫してしまう。「すべては地域・住民のために」という大学の方向性が明確に示された上にこそ、地域に根ざした教育が実現する。令和 2 年に文部科学省から示された「地域連携プラットフォーム構築に関するガイドライン～地域に支持される高等教育へ～」でも指摘されている通り、大学には「知と人材の集積拠点」として、地域連携プラットフォーム構築へ組織的に対応することが求められる。学生の教育や社会人の学び直しを地域でどのように展開していくか、大学が地域の社会資源であり、学生・教職員は地域住民の一人であると認識で行動していくことが必要である。ソーシャルワークは、人びとの環境としての地域に着目し発展してきた。今後、“日本型”地域を基盤とした社会福祉教育を構築していくために、本学会をより一層活用しつつ取り組んでいきたい。

👉 コーディネーター
高杉 公人（新見公立大学）



2022 年度 日本社会福祉教育学会 第 18 回大会（オンライン）に参加して

越石 全（日本医療大学）

業務の都合上、8 月 20 日（土）に開催された、「基調講演」「開催校企画シンポジウム」までの参加であったが、拙文ですがその中での感想を述べさせていただきます。

本学会の詳細なテーマは抄録集に譲りますが、各報告は地域共生社会の実現に資する高い実践力を保持したソーシャルワーカー養成を契機とした、各大学大学の「独自性」「思い入れ」のある社会福祉教育実践内容であった。

基調講演の公文裕巳学長（新見公立大学）の報告は、人間が生得的に獲得している「利他の心」を基盤とした、人間力の涵養を目指した教育実践を組織・系統的に実践している内容であった。「利他」については、コロナ禍において「他者」とどのように「共生」するの



👉 シンポジスト
山本 浩史先生（新見公立大学）

か、その可能性・危うさを含めて重要なテーマであると感じている私にとっては、刺激的な内容でありました。

公文学長の報告を受け、山本浩史氏（新見公立大学）は、共生社会実践演習（副専攻：共生社会推進士）の具体的な教育実践内容の報告を行った。本報告の中心は、新見市内を学びのフィールドとして、山間集落の住民主体・パートナーシップの形成や地域課題の把握及び地域づくりに取り組む内容であった。

渡辺裕一氏（武蔵野大学 社会福祉学科）の報告では、学位授与方針（DP）に基づいて、現在実施している、1 年次～

4年次にかけて実施される「4年間通いつけるフィールドプログラム」「ソーシャルアクションプログラム」「フィールド実習（ソーシャルワーク実習とは別）」「武蔵野市自由講座」等、重層的・多様な構造を持つ教育プログラムが示された。

これらの報告は各大学DPとの関連性を持ちながら、各大学の特徴を示した「思慮深く、熱意溢れる」教育プログラムであり、これらのプログラムを支えている教員らの「汗」も感じられた。これらの経験を通して学生は、社会問題意識を高めて、様々なステークホルダーとの交互作用を通して、新たな価値を形成すると貴重な機会となる。

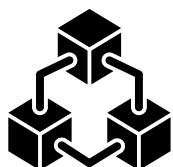
今後、これらの各大学の独自性を持つ教育プログラムは、拡散の方向に進展するのか、さらには、DPを視野に置きつつ汎用的思考（市民リテラシー的な）を養っていくのか、ソーシャルワーカー養成という視点で収斂していくのか、重要なテーマが提供された。

今後、教育機関は教育の質の担保を促進しつつ、実践現場に学生を送り出し、育成も視野においた関わりが重要となる。岡勇樹氏・森亮介氏（NPO 法人 Ubdobe）の「福祉留学」「SOJA MIX PROJECT」（資料提示のみも含む）及び、五嶋仁氏（社会福祉法人大樹会）の「複数地域間の共創型学習環境とプラットフォーム形成」らの実践活動報告からは、人口減少が著しい過疎地域を含む、福祉関連職の人材確保に向けた重要な視点が提供された。今後、福祉人材確保が国家的社会問題となっている現状において、教育機関はこれらの機関と積極的に連携し、プラットフォーム形成に参画していただくことが重要なテーマとなる。

学会参加を通してソーシャルワークをより深化・発展させるために、自己が検討しなければならない課題を以下に示します。

①ソーシャルワークは伝統的に「状況の中の人」をキー概念に、エコロジカル・パースペクティブの視点を養い、「個人と環境の交互作用」を基盤として発展している。ケースワークを丁寧に実践すると環境との交互作用は必然となる（ミクロ・メゾ・マクロの交互作用）。多様な学部が地域というフィールドに参入している現状の中、（新）ソーシャルケースワークの検討。②地域共生社会における「住民の主体化」に対する主体論からの検討、ここから生み出されたソーシャルワーク 24 機能（社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会 平成 30 年 3 月 27 日）の内容の丁寧な検討が必要と感じております。

本学会に関係して頂いたすべての方々に心より感謝申し上げます。



第18回 学会企画シンポジウムに参加して

大村 亜沙美（みやぎ県南中核病院）

私は急性期病院で医療ソーシャルワーカーとして勤務しております。実践現場の実習指導者として、新カリキュラムに向けて実習プログラムを一新する時期が来ており、どのように進めていくか悩んでいる状況で学会企画シンポジウムに参加いたしました。

第18回学会企画シンポジウムは「地域共生社会の実現に資するソーシャルワーカーを育成する実習のあり方～メゾ・マクロレベルのソーシャルワーク実践を実習プログラムにどう盛り込むのか～」というテーマで4名の方から養成校側、実習指導者側からそれぞれが取り組んでいる実習指導について報告がありました。

西川先生はまちおこしを通して、学生の皆さんが地域課題を把握し、実際に地域住民の方々との協働を通して地域に根ざした実習展開について紹介いただきました。



シンポジスト
渡辺 裕一 会員（武蔵野大学）



シンポジスト
森亮介先生（NPO 法人 Ubdobe）



シンポジスト
五嶋仁先生（社会福祉法人大樹会）



👉 コーディネーター
中谷陽明会員（桜美林大学）

中尾先生は地域滞在型実習として社会福祉協議会の所在地に住み込み、ある一つの地域を選定しその地域課題の把握から、分析、提案を行う実習の効果について。地域診断の際に地域住民の方から情報提供を豊富に受けられる特徴についてお話いただきました。

白石氏、西部氏は社会福祉協議会における地域滞在型実習における実習指導者側として実習を受け入れる効果について、実習生が一住民となることから日常での関わりを通して地域を多く学ぶことができること、実習受け入れ自

体が地域福祉活動の可能性を広げるきっかけとなることを、紹介されました。

丸山氏は「ペガサス・トータル・ヘルスケアシステム」をもとに救命救急から在宅療養支援までの医療や介護、福祉、保育の連携の重要性を理解してもらえよう実習プログラムに反映され、個別支援のみならず、組織内でのコーディネート業務などメゾレベルの実践とミクロレベルの実践の循環についても意識され指導されていることをお話いただきました。

新カリキュラム導入に向けてメゾ・マクロレベルの実践を実習プログラムにどのように盛り込んでいくかということが私自身の課題となっておりましたので、今回のシンポジウムは4名の方の取り組みをご紹介いただき、大変貴重な機会となりました。

実習指導者としてメゾ、マクロレベルの実践を日々どのように行っているのか改めて確認し、

新カリキュラムに対応した実習指導ができるよう努めていきたいと思います。



👉 シンポジスト
丸山秀幸先生
（社会医療法人ペガサス馬場記念病院）



👉 シンポジスト（左より）
西部滉平先生、白石順也先生（社会福祉法人 今治市社会福祉協議会）

自由研究発表に参加して

ヴィラーグ ヴィクトル

Vir ág Viktor（日本社会事業大学）

自由研究発表は、大会2日目の8月21日（日）に13時から約1時間半にわたって開催された。高杉公人理事（新見公立大学）が座長を務め、以下4件の研究発表が行われた。

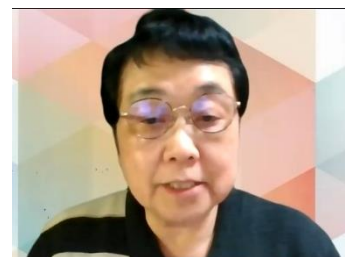


👉 自由研究発表者
「社会福祉教育カリキュラム変遷にみる「演習」の位置づけの特徴に関する研究」小川 智子会員（城西国際大学）

小川智子会員（城西国際大学）は、「社会福祉教育カリキュラムの変遷にみる「演習」の位置づけの特徴に関する研究」というテーマで発表した。歴史的な変遷に焦点を当てながら、演習の位置づけを3つの時期に分け、その特徴について分析することで、福祉系大学の演習担当教員に対する影響性に関する考察を研究目的とした。文献調査を基に、1947年～1985年の「演習科目の誕生前」、1986年～2008年の「演習科目の設置」、2009年～現在の「演習科目の教育内容の規定」の

時期が区別された。演習の在り方について歴史的に振り返ること
で、演習教育の課題と担当教員にこれから求められることについて示
唆を得ることができた。

田中千枝子会員（日本福祉大学）は、「コンピテンシー修得のため
の保健医療福祉の演習教材の開発～組織から地域へメソレベル
の展開の視点から～」をテーマに選んだ。保健医療福祉分野におけ
る共通コンピテンシーに関する教育コンテンツを研究する大規模
プロジェクトの一環として、初学生のうちから保健医療福祉
7 資格を想定して求められるコンピテンシー習得を促す
演習教材の開発プロジェクトを実施した。専門職の自立と
職業倫理、安全の確保と質改善、当人の理解と支援、チーム・
組織の理解と協働的实践、地域・社会活動とソーシャルアク
ションの 5 つのコンピテンシー領域をさらに詳しい要素に細分化し、これらのコンピテンシー
要素所が含まれる領域ごとの 3 事例、合計 15 事例が多職種連携教育において活用できる教材
として出来上がった。



自由研究発表者

「コンピテンシー習得のための保健医療福祉の演習教材の開発～組織から地域へメソレベルの展開の視点から～」
田中千枝子会員（日本福祉大学）



自由研究発表者

「コロナ禍における保育士養成校学生の施設学内実習に関する一考察」高妻瑠弥乃会員（宮崎学園短期大学）

高妻瑠弥乃会員と樋口成樹会員（宮崎学園短期大学）の共同発表
は、「コロナ禍における保育士養成校学生の施設学内実習に関する
一考察」のテーマに沿って行われた。保育実習の全体像について紹
介した上で、コロナ禍の実習教育への影響と学内実習における工夫
について整理した。施設実習と学内実習を経験した学生のアンケート
調査から、それぞれの特徴と課題、長所・短所などが浮き
彫りになり、今後の時代に合った保育実習形態について検
討する材料となった。

平塚謙一会員と若林功会員（常磐大学）は「茨城県地域に
おけるソーシャルワーク専門職のキャリア形成に関する研究
一次報告」というテーマ

について共同発表を行った。研究目的は、茨城県地域におけるソー
シャルワーカーのキャリア形成、特に外的キャリア及び現在の仕
事に対する意識等について明らかにすることであった。そのため
に、県内の社会福祉施設等を通じて、ソーシャルワーカーの勤
務先、職種、雇用形態、勤務年数、業務内容、年収、資格手当、
職場の満足度、仕事の継続意思、分野内の通算継続年数、資格取
得の有無や経緯などについてアンケート調査を実施した。こ
れらのデータは、ソーシャルワーカーを目指している大学生
や福祉の仕事について検討している高校生等の進路選択など
の参考資料ともなることが期待される。



自由研究発表者

「茨城県地域におけるソーシャルワーク専門職のキャリア形成に関する研究
一次報告」平塚謙一会員（常磐大学）

3. 総会報告～日本社会福祉教育学会 2022 年度総会～

第 18 回大会開催期間中の 2022 年 8 月 21 日（日）12:20～13:00 に、オンライン会場
（zoom）において 2022 年度日本社会福祉教育学会総会が開催され、14 名の会員より参加があ
りました。志水会長の挨拶の後、以下の議題について議事を行い、全て承認されました。

議事次第

- | | |
|---------|---------------------------------|
| 第 1 号議案 | 2021 年度 事業報告（案） |
| 第 2 号議案 | 2021 年度 決算報告および監査報告（案） |
| 第 3 号議案 | 2022 年度 事業実施中間報告 兼 補正事業計画・予算（案） |
| 第 4 号議案 | 2023 年度 事業計画（案） |
| 第 5 号議案 | 2023 年度 予算（案） |

議事

- (1) 第1号議案(2021年度事業報告)について
小関久恵事務局長より理事会・事務局・渉外関係、白川充理事(第2委員会)より大会・研究集会関係、小山隆理事(第1委員会)より学会誌・NL関係について事業報告が行われ、全会一致で原案通り承認された。
- (2) 第2号議案(2021年度決算報告および監査報告)について
小関久恵事務局長より決算報告、福山和女監事より会計監査結果の報告が行われ、全会一致で原案通り承認された。
- (3) 第3号議案(2022年度事業実施中間報告兼補正事業計画・予算)について
・小関久恵事務局長より理事会・事務局・渉外関係、高杉公人理事より第18回大会について、白川充理事より第13回春季研究集会を課題研究「ICTを活用した社会福祉教育のあり方に関する総合的研究」をテーマに実施することが報告された。
・保正友子理事より学会誌について、年2回発行を目指しているが投稿が少なく近年は合併号となっていること、積極的な投稿の仕組みや査読体制の整備を検討していくことが報告された。
西川ハンナ理事よりNLを紙面から学会ホームページ上へのウェブ掲載による発行に切り替えていく方針であることが報告された。
・小関久恵事務局長より補正予算案について報告され、2021年度には予備費から支出をしていた課題研究を2022年度補正予算案では新たに費目立てしていることが報告された。
・以上について全会一致で原案通り承認された。
- (4) 第4号議案(2023年度事業計画)について
・小関久恵事務局長より理事会・事務局・渉外関係、小山隆理事より学会誌・NL、白川充理事より研究関連について事業計画の報告があり、第19回大会は阪口春彦理事、川島恵美理事が担当すること、テーマや日程等は検討中であること、第13回研究集会についても内容を協議中であること等の報告が行われ、全会一致で原案通り承認された。
- (5) 第5号議案(2023年度予算)
小関事務局長より予算について報告があり、全会一致で原案通り承認された。

以上

4. 福祉教育実践/研究報告

◆[連載コラム] ソーシャルワークとリサーチ あれやこれや

安藤 幸(京都大学大学院教育学研究科)



③ 科学としてのソーシャルワーク

いつものように朝イチでEメールを確認すると、Society for Social Work and Research(全米ソーシャルワークとリサーチ学会)からメッセージが届いていました。2023年1月に5日間アリゾナ州フェニックスで開催される年次大会のお知らせです。懐かしい思いが蘇ります。

アメリカの大学でソーシャルワークの大学院生、後に教員をしていた時、秋学期終盤の11月に開催されるCSWE(全米ソーシャルワーク教育委員会)年次大会と、春学期が始まってすぐの1月に開催されるSSWR年次大会は大きなイベントでした。自分の研究を発表したり、新しいテーマの情報を収集したり、ネットワーキングをしたり。CSWEとSSWRはとても心躍る機会でした。

そんなSSWR 2023のテーマは「Social Work Science and Complex Problems: Battling Inequalities + Building Solutions」とのこと。意識すると、「ソーシャルワーク科学と複雑な問題：不平等に対抗し、解決策を打ち立てる」とでもなるでしょうか。不平等を生み出す複雑な問題とそのソーシャルワーク的解決策は、とても興味深いテーマです。しかしそれよりもなにより私の目を引いたのは、「Social Work Science(ソーシャルワーク科学)」という言葉です。

「Social Work Science」は、いつから使われるようになったのでしょうか。そこで過去の年次大会のテーマを調べてみたところ、2021年の年次大会のテーマではすでに「Social Work Science for Social Change（社会変革のためのソーシャルワーク科学）」とありました。続く2022年の年次大会のテーマは「Social Work Science for Racial, Social, and Political Justice（人種的、社会的、政治的正義のためのソーシャルワーク科学）」となっていて、2023年も「Social Work Science」シリーズを踏襲しているようです。



1915年のエブラハム・フレクスナーによる「ソーシャルワークは専門職か？」の提言以降、「ソーシャルワークはアートかサイエンスか？」という議論は続けられてきました(Samson, 2015)。人と社会のウェルビーイングの追究には、エビデンスに基づくソーシャルワーク教育やソーシャルワーク実践が不可欠であり、エビデンスをもたらすものは科学とされます。その点においてソーシャルワークは、科学のコンシューマーであることは確かです。その一方で、Shaw(2014)は、ソーシャルワークはたしかに実践に基づく専門職であるとしながらも、人や社会の課題に向き合うためのソーシャルワーク固有の知識体系を有していないとし、Brekke(2013)もまた、サイエンスの高みに上り詰めるためにはソーシャルワークが広域な知識を内包化・体系化していく必要性を説いています。

SSWRによる「Social Work Research」のフレーミングは、あるテーマをもとに、ソーシャルワークの研究者がソーシャルワークの視点からエビデンスを重ね、ソーシャルワークの知識体系を構築する協働作業なのでしょう。

前回のコラムの最後に、「次から、ソーシャルワークにおける混合研究法について理解を深めていきたい」と書きつつ、今回は「Social Work Science」について取り上げました。次こそは、Social Work Scienceを構築する研究手法について考えていきたいと思います。

参考

- Brekke, J. S. (2013). A science of social work, and social work as an integrative scientific discipline: Have we gone too far, or not far enough? *Research on Social Work Practice*, 24(5), 517-523.
- Gehlert, S. (2015). Social work and science. *Research on Social Work Practice*, 26(2), 219-224.
- Sansom, P. L. (2015). Practice wisdom: the art and science of social work. *Journal of Social Work Practice*, 29(2), 119-131.
- Shaw, I. (2014). A science of social work? Response to John Brekke. *Research on Social Work Practice*, 24(5), 524-526.
- Thyer, B. A. (2007). The quest for evidence-based practice?: We are all positivists! *Research on Social Work Practice*, 18(4), 339-345.

ゼミ活動・子どもの遊び場「にっこりランド」の企画・運営

小関久恵（東北公益文科大学）

本学が立地する山形県酒田市日向（にっこう）地区における、ゼミ活動『にっこりランド』をご紹介します。日向地区は高齢化率が50%を超えており、市内でも高齢化と人口減少が顕著に進む中山間地域です。私は2011年から当該地区の地域づくり活動全般（地域防災、交流の場づくり、地域ビジョンづくり他）に、大学の教育プログラムを通じて伴走してきました。

『にっこりランド』では、廃校利用のコミュニティセンター内に開設されたコミュニティカフェ「日向里（にっこり）café」※において、子育て世代の方にもゆっくりカフェを利用してもらいやすい環境をつくることを目指し、子どもの遊び場を企画・運営しています。

活動が始まった経緯としては、2019年にコミュニティカフェができるタイミングで、この「場」をどう活用していくか、アイデアや可能性を検討するワークショップを住民・行政・大学の関係者が集まり開催。その際、「多様な人が集う場づくり」と「日常生活を支える仕組みづくり」に向けて「大学生のできること」としてゼミ生が提案したアイデアが、この『にっこりランド』でした。その後、同年11月からスタートし現在に至ります。

スタートしてすぐにコロナ禍に突入してしまいましたが、緊急事態宣言が出された際にも、オンライン（zoom）で親子とつながり、画面越しではありますが「絵しりとり」や「こいのぼりの飾りづくり」など、工夫を凝らしながら活動の灯を消さないよう取り組んできました。

今回は、動画という媒体によってこの福祉教育実践を報告させていただきます。なお、この動画もゼミ生が制作しています。どうぞご覧ください。



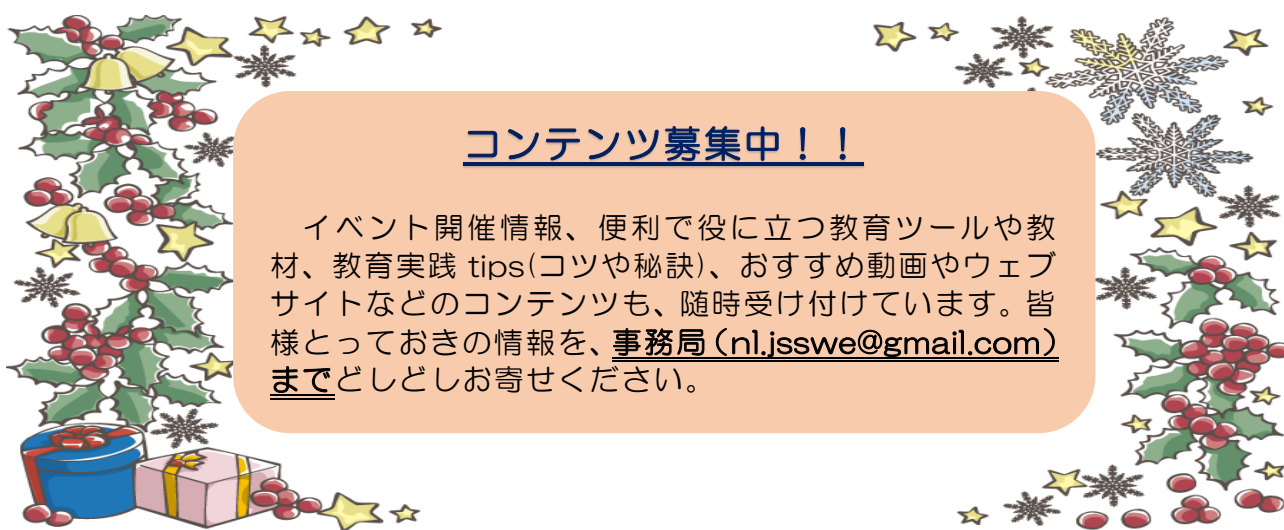
👉 小関久恵会員（東北公益文科大学）とゼミ活動に意欲的なゼミ生たち
小関会員は、下段一番右1人目

※日向里caféは、住民・行政・企業・大学の協働・共創により、閉校した小学校をDIYによってリノベーションして開設した、住民運営のカフェです。日替わりで住民が店長となってランチを提供しており、本学の学生も月1回担当しています。カフェには、産直コーナーや手作り雑貨コーナーなども設置され、地域内外をつなぐ場となっています。なお、「日向里かふえ」が正式な表記で、この名称も住民から募集し投票によって決定しました。



📺 小関ゼミ活動・子どもの遊び場「にっこりランド」紹介動画は、コチラから

5. お知らせ



コンテンツ募集中！！

イベント開催情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践 tips(コツや秘訣)、おすすめ動画やウェブサイトなどのコンテンツも、随時受け付けています。皆様にとっておきの情報を、事務局 (nl.jsswe@gmail.com) **まで**どしどしお寄せください。

今号（NL40 号）は、オンラインでの配信となりますが、次号（NL41 号）は、紙面での発行となります。

2023 年度より
オンラインのみ

の配信となります。

M e r r y C h r i s t m a s

6. 編集後記

気がつけば、あっという間に 11 月になり、季節は一気に秋から冬へ変わっていきます。朝晩の冷え込みも厳しくなり始め、1 年が終わろうとしております。

12 月に入ると気持ちも街の雰囲気も年末の様相になり、なんだか落ち着かずソワソワとしているうちに、あっという間にお正月になりそうです。



今年も、皆さま方からのお力添えをいただきながらニュースレターを発信することができました。次号からは、オンラインのみでの配信となります。

これからますます忙しい時期になります。皆さまもお風邪などひかぬよう、体調管理に気をつけながらお過ごしくださいませ。

来年も皆さま方とともに学会運営ができますことを祈念します☆多素敵なクリスマスと良いお年をお迎えください。

（ニュースレター編集委員）